

インフルエンザに対する オセルタミビルと葛根湯の相乗効果

西 勝久

医療法人明浩会西大宮病院

はじめに

新型インフルエンザが猛威を奮っている。昨年未から今春初め当院でも多くのインフルエンザA型陽性患者が来院し、その約8割にオセルタミビルが処方された。オセルタミビルはインフルエンザウイルスの増殖を抑制し治癒に向かうように仕向けるが、治癒そのものは患者自身の治癒力まかせである。ここに漢方薬併用の意義が生じる。漢方薬は、ウイルスがRSウイルス、ライノウイルス、インフルエンザウイルスのいずれであれ、患者の闘病反応に合わせて処方が決定される。これまでも漢方薬は、ウイルスや細菌などと闘ってきたが決して満足できる結果が得られていなかった。それは漢方薬が非力であったからではなく、その時代の環境、文化水準がすでに感染症に敗北していたからである。

現代では、インフルエンザに対して、オセルタミビル、サナミビルという強力な武器で蔓延も最小限に抑えることが可能である。同時に、漢方薬については、作用機序も徐々に解明され、ウイルス疾患に対しては、自己防衛力を高めることも解明されつつある。

そこで今回、当院を受診したインフルエンザA型患者に対し、オセルタミビル単独とオセルタミビルと漢方薬の併用による治癒反応の傾向を調査した。対象に偏りがありエビデンスとは言い難いが、今後のインフルエンザ治療の参考になれば幸いである。

対象と方法

2008年12月から2009年2月末日までに季節性インフルエンザA型と診断され、オセルタミビル単独か、オセルタミビルと葛根湯を併用投与した患者を対象とした。葛根湯は、クラシエ葛根湯エキス細粒(KB-1)

1日7.5gを朝・夕食前投与した。オセルタミビル群では葛根湯以外の漢方薬の併用は禁止したが、両群とも解熱薬、鎮咳薬や去痰薬を併用している場合もあった。

投与後、解熱までの期間、症状消失までの期間、処方に対する満足度についてアンケート調査を行った(表)。

表 アンケート内容

質問1 病院でもらった薬をのんでから、どのくらいで平熱に戻りましたか？
①飲んだその日のうちに、ほとんどの熱はさがった。 ②飲んだ次の日に、熱はさがった。 ③熱がさがるまで2～3日かかった。 ④熱がさがるまで、4日以上かかった。 ⑤わからない。覚えていない。
質問2 のどの痛み、鼻水、咳、身体がだるいなどの身体の症状はだいたい何日ぐらい続きましたか？(すべての症状がなくなるまで)
①飲んだ次の日には、ほとんどの症状がなくなった。 ②飲んでから、2～3日続いた。 ③飲んでから、4日以上(1週間以内)続いた。 ④飲んでから、1週間以上続いた。 ⑤わからない。覚えていない。
質問3 今回のインフルエンザ治療やお薬について、お尋ねします。
①治療やお薬については、非常に満足している。 ②治療やお薬については、だいたい満足している。 ③治療やお薬については、あまり満足できなかった。 ④治療やお薬について、とても不満が残った。 ⑤わからない。覚えていない。

結 果

無作為にアンケート用紙を送付した122名のうち49名から返答を得た。返答者の内訳は、オセルタミビル単独群41名、オセルタミビル+葛根湯併用群8名であった。

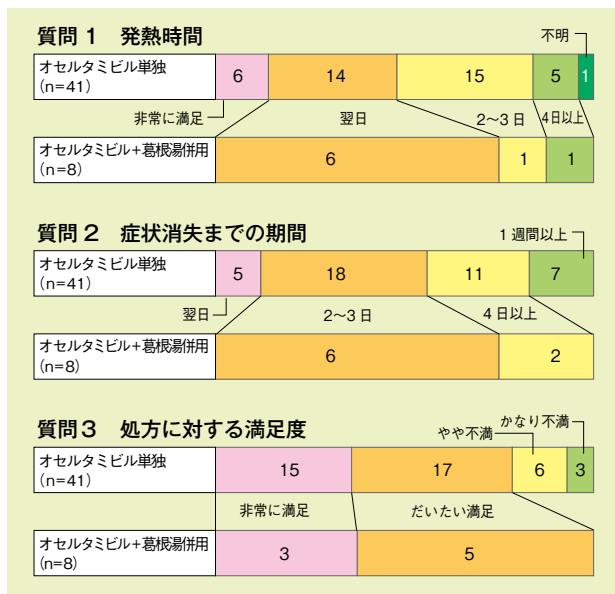
集計の結果、発熱期間は、翌日までに解熱したのはオセルタミビル単独群で49%、オセルタミビル+葛根湯併用群で75%であった。症状消失までの期間は、2～3日までに消失したのがオセルタミビル単独

Points

- オセルタミビルと葛根湯の併用は、解熱を早め処方の満足度を高める。
- 葛根湯の使用目標は、「項背強ばる」症状である。

群で56%、オセルタミビル+葛根湯併用群で75%であった。処方に対する満足度は、だいたい満足以上がオセルタミビル単独群で78%、オセルタミビル+葛根湯併用群で100%であった(図)。

図 アンケート集計結果



考 察

オセルタミビルについては、耐性ウイルスの出現も問題視されているが、今なお、インフルエンザ治療の第1選択薬である。一方、麻黄と桂枝を組み合わせた漢方処方に抗インフルエンザ効果があることが確認されつつある。生薬のウイルスへの直接作用もあるが、主な作用機序はサイトカインの産生を調節することにあると考えられている。葛根湯は、IL-12とIFN- γ の産生を亢進することで、ウイルス増殖を抑制するといわれている。また、IL-1 α の過剰反応を抑制して、解熱効果を示すともいわれている¹⁾。

今回の調査集計結果からも、オセルタミビル単独でも翌日までに約半数が解熱し、オセルタミビル+葛根湯併用群では75%が解熱した。オセルタミビルや葛根

湯が投与された時期が感染の何日目であったかという問題もあるが、オセルタミビルはインフルエンザA型に対する治療薬としてまだまだ有効かつ十分であると思われる。また症例数は少ないが、解熱に関しては、葛根湯の相乗効果も期待できるものと思われる。

漢方の真骨頂は、症状に対する効果である。龍野一雄によれば、『葛根湯は、運用一 発熱、悪寒或いは悪風、僧帽筋の範囲に於ける筋肉緊張、脈浮数緊を目標にする。運用二 熱がなくて項背部緊張によって使う。運用三 項背とは限らず、身体の何処でも構わないが殊に上半身に於いて限局性の化膿性浸潤に使う。運用四 発熱して悪寒或いは頭痛し、且つ下痢するものに使う』としている²⁾。

つまり、葛根湯を使用するときの目標で大切なのは、「項背強ばる」症状である。われわれも「項背強ばる」や肩や頸、肩甲骨間が“凝る”、“はる”という訴えを認めた患者に葛根湯を併用するようにした。葛根湯は、証にしたがって処方すると症状消失の効果は高く、証を大切にオセルタミビルと併用すれば効果はさらに上がるものと思われる。

患者は迅速な解熱を病気に対して有効と判断する傾向がある。葛根湯併用群で満足度が高いが、オセルタミビル単独群より症状消失しやすいことが示唆され、また葛根湯を内服したことが治癒へのさらなる保証となり、それが満足度に現れたと考えることもできる。

ま と め

症例は少ないが、季節性インフルエンザ治療にオセルタミビルと葛根湯を併用した場合の効果について調査した。治療経過をみる限り、相乗効果の可能性が示唆された。また、現代医学的にも機序が解明されつつあり、今年、季節性インフルエンザにも応用可能と思われる。ただし、葛根湯の証を大切にしていきたいものである。

●参考文献●

- 1) 日経メディカル No.501: 46-49, 2009.
- 2) 龍野一雄 漢方入門講座 p200-206, 中国漢方 平成11年.